

豊明希望チャペル礼拝

2026/5/3

「信じる者はみな義と認められる」

使徒の働き 13 : 32~43



今日の箇所は、パウロの説教の2回目であります。

彼は、ユダヤ人で、それも、ユダヤ人の聖書の学者で、ユダヤ人の宗教的なリーダーのような存在でもありました。しかし、彼は、ステパノという弟子の殉教の場面を目撃し、おそらく心は揺れ動いていったのではないのでしょうか・・・

この人は、悪い人ではないかもしれない、いや、ステパノの言うとおりに、われらユダヤ人が待っていたメシヤかもしれない・・・そんな想いの中、しかし、命じられるままに、クリスチャンを牢屋に入れようと、意気揚々とその使命を果たそうとしますが、途中で、復活のイエス様に出会うのです。あなたが迫害しているイエスだと主は言われます。

彼は、聖霊に打たれ、今までの疑問が氷解するようにして、180度、人生を変えます。こんどは、命がけで、このイエス様を、メシヤ、救い主であって、神さまである事を、宣べ伝えるのです。

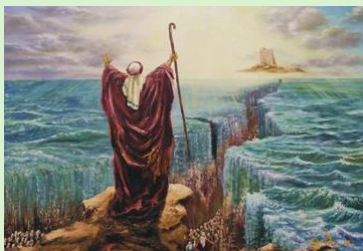
前回からは、小アジアのピシディアのアンティオキア(13:14)のユダヤ教の会堂で、イエス様を殺したユダヤ人を相手に、講壇に立ちます。彼が、壇上の立つと、案の定、あいつユダヤ人の裏切り者じゃないか・・・どんな顔して、このユダヤ教の会堂にいるのか！とざわついたのでしょうか、彼は、まず、手振りで静かにして



(13:16)と、まあ、聞いてくれと話し始めたのです。

そして、そのメッセージ内容は、イエス様を殺したユダヤ人を相手に、イエス・キリストこそ、われらユダヤ人が待っていたメシヤ、救い主だと堂々としたものでした。

彼は、自分がユダヤ人ですから、いかにも、自分たちが生まれながらに、母親の膝で、眠りながら聞かされた英雄物語、父親から、聞かされた、ユダヤ人の祖、アブラハムや、あのダビデ王と、そして、人類の中から、唯一、律法を授けられた民であること、モーセがその役割を委ねられが、モーセ以来の律法の民である事を誇りをもって、教えられてきたこと、そんな人物達を、あえて取り上げるのです。





そして、こう言うのです。イエス・キリストは、ダビデより上、モーセより上だと。ユダヤ人がこれ言われたら、思いつく限りの彼らの英雄の二人ですから、そんなことを言われたら、ダビデやモーセと比較しやがってと怒るか、もう聞いてられないと部屋から出て行ってしまおうか、下手をすれば、その場で取り押さえられて、石を打たれて殺されていたかもしれないのです。彼は、ユダヤ人におもねることなく、真正面から、彼が確信した真理を語りました。

私が、名古屋の栄あたりに行って、秀吉よりキリストだと語り、熱田神宮に行って、その門で、信長よりもキリストだと語り、岡崎に行って、家康よりもイエス・キリストとかたるようなものです。(違うかな?)



しかし、たしかに、彼は、ユダヤ人の誇り、ダビデとモーセを引き合いに、イエス・キリストがそれ以上で、あの、大男ゴリアテを倒してイス

ラエルを救ったダビデが、素晴らしい王だというなら、イエス・キリストは、死なない永遠の王だと言います。ダビデはいずれにしても、死んだが・・・と。

また、モーセは、人類に、はじめて神の命令を伝えただけで、イエス・キリストは、神の最終計画である福音を、救いの結論を語ったのだと。

彼はまず、ユダヤ人の父アブラハムから話し始めますが、すぐにダビデに話しを進めます。少し長いですが、ダビデの箇所を今一度読みます。



「13:32 私たちもあなたがたに、神が父祖たちに約束された福音を宣べ伝えています。13:33 神はイエスをよみがえらせ、彼らの子孫である私たちにその約束を成就してくださいました。詩篇の第二篇に、『あなたはわたくしの子。わたしが今日、あなたを生んだ』と書かれているとおりです。13:34 そして、神がイエスを死者の中からよみがえらせて、もはや朽ちて滅びることがない方

とされたことについては、こう言っておられました。『わたしはダビデへの確かで真実な約束を、あなたがたに与える。』13:35 ですから、ほかの箇所でもこう言っておられます。『あなたは、あなたにある敬虔な者に滅びをお見せになりません。』13:36 **ダビデ**は、彼の生きた時代に神のみこころに仕えた後、死んで先祖たちの仲間に加えられ、朽ちて滅びることになりました。13:37 しかし、神がよみがえらせた方は、朽ちて滅びることがありませんでした。』

比較しましょう。

<**ダビデ**>

* 生き、死んで、朽ちて、滅びた。 :36

<**イエス**>

* 神はイエスをよみがえらせ(イエスは死からよみがえった) :33&:34

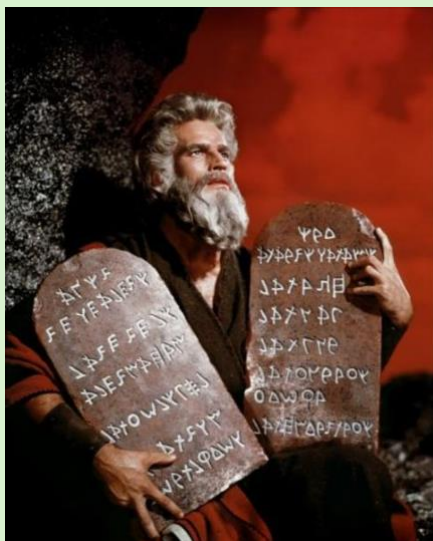
* 朽ちて滅びない :37

* あなたはわたしの子(イエスは神の子) :33

先を急ぎますが、これを聞いていたユダヤ人達の反応はどうだったでしょうか・・気になりますね。こうなりました。来月の箇所になります。念のために見ておきましょう。ルカは、人々の、このパウロのメッセージへの反応をことさら、詳細に記録しておりますので、見ておきましょう。おそらく、ルカにとっても、意外な反応だったようです・・

「13:42 二人が会堂を出るとき、人々は、次の安息日にも同じことについて話してくれるように頼んだ。13:43 会堂の集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神を敬う改宗者たちがパウロとバルナバについて来たので、二人は彼らと語り合い、神の恵みにとどまるように説得した。13:44 次の安息日には、ほぼ町中の人々が、主のことばを聞くために集まって来た。」

先に言いましたように、パウロが会堂で立ったときは、ちょっとした騒ぎでしたが、このパウロのメッセージを聞いて、殺されるかと思ったら、おそらく、パウロもそのような覚悟で立った事でしょうけれど・・意外にも、彼らにとって見ると、パウロのような、ユダヤ教の奥義まで極めた、エルサレムでも最も高位のガマリエル門下のエリートの学者で、熱心にユダヤ教を信じ、ユダヤ教の教えを体験した人間の**ことば**だからこそ、見過ごせない言葉、考えるべきこととなったのかもしれない。



同じ内容を来週聞きたいと言われ、ついでに、彼らが、お前も聞いて見ろよと、家族や知人を誘って、「ほぼ町中の人々が」とルカは言いますが、ちょっと大げさかも知れませんが、そのくらいの勢いで、会堂に押し寄せたというのです。

そして、今日の箇所では、モーセについても、モーセよりキリストだと語ったのです。その箇所をみましょう。

「13:38 ですから、兄弟たち、あなたがたに知っていただきたい。このイエスを通して罪の赦しが宣べ伝えられているのです。また、モーセの律法を通しては義と認められることができなかつたすべてのことについて、13:39 この方によって、信じる者はみな義と認められるのです。」

そして、この後、パウロは、多くの預言者に従わなかつたように信じないのではなく、この神の赦しを信じなさいと言うのです。(：40～43)

今、私たちは、ローマ人への手紙から律法と福音ということについて教えられていますが、ここでの、このパウロの説教は、そのローマ人への手紙を要約したような言葉になっています。

ローマ人への手紙から、律法は、私たちに罪の何たるかを教えても、その教えだけでは、その罪から解放はしてくれないことを教えられています。

いくら、ユダヤ人が、私たちは、特別に神の御心である律法を、人類の中で唯一、直接、教えられた民だと誇ってみても(それはそうだが・・・)、その律法の教えに従って自らを律して、律法の基準に到達させようと思っても、アダム以来の原罪を抱えたままの人間には永遠に、克服不可能な事、少なくとも、天国の基準、あるいは、創造の初めにあった、アダムの基準にさえ到達出来ない・・・しかし、イエス・キリストによるなら、イエス・キリストが十字架で死んで下さり、さらに言えば、そんな救い主を神が送ってくれたから、その神の御心を信じて、イエス・キリストが罪の赦しを与えて下さると信じるなら、罪が赦され(：38)、義と認められる(：39)と語るのです。

私は、ユダヤ人が、この話しに感動して、翌週も語ってくれと語り、親戚知人を全部集めて、聞きに来たと言うことを思うとき、さすがユダヤ人、聖書の民だと思うのです。

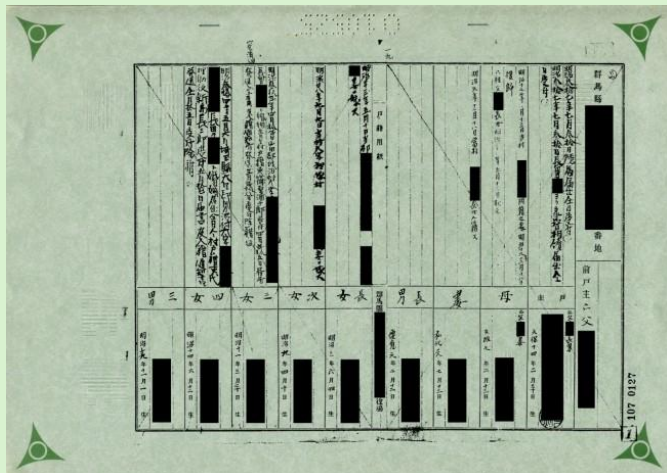
当時も今も、外国にいるユダヤ人のほうが、ユダヤ教に熱心だとも言われることがあるのですが、熱心に、神の教えを守ろうとしていたからこそ、パウロの言っていることが良くわかったのかも知れないと思うのです。私たちは、義人にはなれない、日々、聖書の基準に生きようとしているけれど、特に、この異境の地で、誘惑の多い、この異邦人の地で、そして、その異邦人達とうまく、合わせてやっけないと生きられない身からすると、どんなに、正しく生きる事が困難なのかと言うことを、あるいは、環境に守られている、パリサイ人や律法学者達よりも、いたいほどに、いや、痛さや罪や自分に対する落胆や、失望を経験するほどに、神は、そんな厳しいのかと、赦して下さらないのかと・・・そんな想いの中、実は、イエス・キリスト、私たちが十字架につけて殺したあの人が、メシアだったのかと・・・私たちの罪を赦して下さるために十字架について下さったのかと。

今、本当の意味で、神の民となれるのだと、あるいは、本当の意味で、神の子になれるのだと、合点がいったのかかもしれないと思うのです。

やっぱり、神は、神だった、私たちを見捨ててはおられない。愛しておられる

のだと・・・

少し、踏み込んだ話しになるかも知れませんが、みなさん、養子縁組についてご存じだと思います。M先生のお宅には、そんなお子さんをたくさん迎えておられます。率直に、そのことについて、話すことが何度もあります。K先生の、お宅にもお迎えになりました。今は、色々な立場とスタンスで、自分の肉親の父や母と暮らせない子供たちを家庭に引き取る選択肢があります。独立するまでとか、もっと短い期間だけとか。



ある時、ある姉妹が、私の家に、小さいお子さんをお迎えすることになりました。特別養子というかたちで、引き受けますと言われました。彼女には、長男次男の実子がおられて、3番目のお子さんとして養子を迎えました。この特別養子制度は、特に特徴的なのは、戸籍には、養子の一言が記載されます。しかし、特別養子の場合、少なくとも、

その養子の文字が戸籍にも入らないのです。戸籍上もまったく実子と同じなのです。どうして、その事にこだわりますか？と、姉妹に聞きました。その子の過去を抹消するためですか？そうではありませんと。本人には、もちろん隠すつもりは何もありませんと。ただ、この子が大きくなって、この事をあらためて尋ねられたとき、戸籍に表された親の思いをその子に伝えるためですと。すなわち、「あなたは、もう、何のただし書きもない、私の子どもだよ。」「他の兄弟と全く変わらない。私の子どもだよ。」「ほら、そのために、私は、あえてこの特別養子を申請したの。何も変わらない子どもであることを知ってもらいたいから。」ということをとおっしゃられました。

神が、イエス・キリストを十字架によって、まるで、もう過去のいやな思い出と、たとえば、罪であっても、それを引きずらなくていい、今から、正真正銘の私の子だ、私が永遠なように、あなたも永遠の命を持つ。私が天にいるように、あなたも、永遠に天に住むのだと、「あなたは、もう、何のただし書きもない、私の子どもだ。」と、そのようにして、下さるのが、イエス・キリストだと、パウロはここで言っているのです。

さて、この週、この驚くべき恵みを覚え、あらためて、私は、あなたの贖いを受け入れます。私の罪を赦してください感謝します。あなたの子にして下さい。あなたの家の戸籍に載せて下さい。神の国の一員にして下さいと告白し歩む、この恵まれた週でありたいと願います。